



実社会との接点を重視した
課題解決型学習プログラムに係る実践研究

成果発表会

2023（令和5）年1月20日（金）

国立大学法人東京学芸大学

研究主題と趣旨

研究主題

「遊び」を生かして主権者を育てる社会科・公民科を中心とした小中高連携カリキュラムの開発

趣旨（主題の設定理由）

- ①「遊び」の持つ自発性、主体性、他者性、協働性といった特性や、発達段階に応じた実社会との接点の様々な可能性に着目して、小中高の連携を図りつつ教科等横断的、社会参画的なカリキュラム・マネジメントを試みる。
- ②社会科・公民科を中心に、自立し、他者と連携・協働しながら、社会を生き抜く力など、主権者としての資質・能力を育む学習プログラムを開発する。

研究主題と趣旨

研究主題

「遊び」を生かして主権者を育てる社会科・公民科を中心とした小中高連携カリキュラムの開発



「計画には**遊び**がないと息が詰まる」「人生には遊びが不可欠だ」

授業者が子ども達にそれらを**授業計画の中で保障**する

趣旨（主題の設定理由）

- ①「遊び」の持つ自発性、主体性、他者性、協働性といった特性や、発達段階に応じた実社会との接点の様々な可能性に着目して、小中高の連携を図りつつ教科等横断的、社会参画的なカリキュラム・マネジメントを試みる。
- ②社会科・公民科を中心に、自立し、他者と連携・協働しながら、社会を生き抜く力など、主権者としての資質・能力を育む学習プログラムを開発する。

「遊び」とは

一般的な「遊び」

- ・具体的な種類の遊び（双六や鬼ごっこ，サッカーなど）を集合した呼称
- ・「余白」や「余裕」、「夢中」や「没頭」の持つ価値を意味する言葉

本学附属学校園が考える「遊び」

- ・子ども達に諸課題に対して考える時間や体験する時間を十分に確保し，それら諸課題を解決するために考えることに没頭することが，子ども達を地域や社会の課題を主体的に考えることができる主権者として育成することに資すると考える。
- ・子どもたちが直面する課題等に向き合う時間を十分に確保した『「余白のあるカリキュラム」＝「遊び」のもつ価値付けを重視する授業デザイン』を実行するためには，既存のカリキュラムを有機的に関連付けるカリキュラムデザインを行う必要がある。社会科を中心に主権者教育を実施する際，この観点も重視しながら「遊び」を重視した主権者教育の在り方を模索する。

	小学校・中学校・高等学校で共通理解した「遊び」	
	具体的な種類としての「遊び」（具体的な活動）	余白や余裕などの「遊び」がもたらす主な活動
遊びの具体的な姿	<ul style="list-style-type: none">・施設見学・体験活動・当事者との対話（講話）・インタビュー調査・再現活動・自由な表現活動（想像図を書く，歌や詩を作る，模型を作るなど）	<ul style="list-style-type: none">・発見する ・おどろく ・疑問に思う ・質問をする・問題を議論する ・解決策を導き出す ・相違点を検討する・関連性を検討する・柔軟な発想で課題に対処しようとする・斬新な発想を生み出す（創造的）・協働的に大きな課題を解決するために取り組む

「遊び」とは

一般的な「遊び」

- ・具体的な種類の遊び（双六や鬼ごっこ，サッカーなど）を集合した呼称
- ・「余白」や「余裕」、「夢中」や「没頭」の持つ価値を意味する言葉

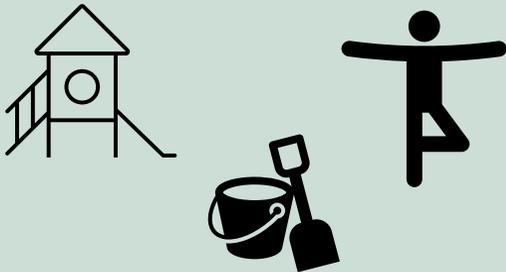
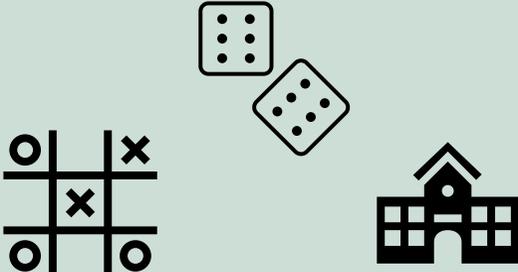


本学附属学校園が考える「遊び」

- ・子ども達に諸課題に対して考える時間や体験する時間を十分に確保し，それら諸課題を解決するために考えることに没頭することが，子ども達を地域や社会の課題を主体的に考えることができる主権者として育成することに資すると考える。
- ・子どもたちが直面する課題等に向き合う時間を十分に確保した『「余白のあるカリキュラム」＝「遊び」のもつ価値付けを重視する授業デザイン』を実行するためには，既存のカリキュラムを有機的に関連付けるカリキュラムデザインを行う必要がある。社会科を中心に主権者教育を実施する際，この観点も重視しながら「遊び」を重視した主権者教育の在り方を模索する。

	小学校・中学校・高等学校で共通理解した「遊び」	
	具体的な種類としての「遊び」（具体的な活動）	余白や余裕などの「遊び」がもたらす主な活動
遊びの具体的な姿	<ul style="list-style-type: none">・施設見学・体験活動・当事者との対話（講話）・インタビュー調査・再現活動・自由な表現活動（想像図を書く，歌や詩を作る，模型を作るなど）	<ul style="list-style-type: none">・発見する ・おどろく ・疑問に思う ・質問をする・問題を議論する ・解決策を導き出す ・相違点を検討する・関連性を検討する・柔軟な発想で課題に対処しようとする・斬新な発想を生み出す（創造的）・協働的に大きな課題を解決するために取り組む

「遊び」が引き出す力

基礎体力が養われる 積極性が育つ	失敗・経験・試行錯誤から 学べる	コミュニケーション能力が 育つ
		
<ul style="list-style-type: none">• 走る、跳ぶ等の基礎的な運動能力が向上• 自由度が高いため、自然と没頭していく• どうしたいという意欲が高まる	<ul style="list-style-type: none">• 失敗から学ぶ• 困難な状況を克服しようとする• どうすれば良いのか考える	<ul style="list-style-type: none">• 様々な人といっしょに遊ぶ楽しさ、協調性を学ぶ• 道具を譲る、自分の考えを伝える、他者の意見を聞く
◆ 自発性	◆ 主体性	◆ 他者性、協働性

「遊び」とは

一般的な「遊び」

- ・具体的な種類の遊び（双六や鬼ごっこ、サッカーなど）を集合した呼称
- ・「余白」や「余裕」、「夢中」や「没頭」の持つ価値を意味する言葉

「遊び」が
引き出す力

本学附属学校園が考える「遊び」

・子ども達に諸課題に対して考える時間や体験する時間を十分に確保し、それら諸課題を解決するために考えることに没頭することが、子ども達を地域や社会の課題を主体的に考えることができる主権者として育成することに資すると考える。

・子どもたちが直面する課題等に向き合う時間を十分に確保した『「余白のあるカリキュラム」=「遊び」のもつ価値付けを重視する授業デザイン』を実行するためには、既存のカリキュラムを有機的に関連付けるカリキュラムデザインを行う必要がある。社会科を中心に主権者教育を実施する際、この観点も重視しながら「遊び」を重視した主権者教育の在り方を模索する。

「遊び」の具体的な姿

小学校・中学校・高等学校で共通理解した「遊び」		
	具体的な種類としての「遊び」（具体的な活動）	「余白」や「余裕」などの「遊び」がもたらす主な活動
「遊び」の具体的な姿	<ul style="list-style-type: none">・施設見学・体験活動・当事者との対話（講話）・インタビュー調査・再現活動・自由な表現活動（想像図を書く，歌や詩を作る，模型を作るなど）	<ul style="list-style-type: none">・発見する・おどろく・疑問に思う・質問をする・問題を議論する・解決策を導き出す・相違点を検討する・関連性を検討する・柔軟な発想で課題に対処しようとする・斬新な発想を生み出す（創造的）・協働的に大きな課題を解決するために取り組む

研究の概要

実践校（類型Ⅲ）

- ・①東京学芸大学附属竹早小学校（12学級411名）
- ・②東京学芸大学附属竹早中学校（12学級426名）
- ・③東京学芸大学附属高等学校（普通科／24学級962名）

実践内容

2021（令和3）年度	2022（令和4）年度
<p>①竹早小学校 －ぼくらのリンピック（3年/自己実現活動※/17時間） ※「自己実現活動」教育課程特例校認定によって設置された教科横断的な学びを行う教科</p> <p>②竹早中学校 －サッカー（3年／保健体育科／8時間）</p>	<p>①竹早小学校 －国民の権利としての選挙(6年/社会科/6時間) －割合（出生率と少子化）（5年/算数科）</p> <p>②竹早中学校 －私たちの暮らしと政治（3年/社会科/6時間）</p> <p>③附属高等学校 －政治参加と民主政治の課題（2年/公民科(現代社会)/3時間）</p>

「遊び」と主権者教育の関係性について

- 「遊び」とは、関わりの中で行われる主体的で自由な活動であるとともに、自発的な参加意識のもと、異質で多様な他者と連携・協働することが活動の面白さをもたらす活動であり、活動を通じて自己肯定感や自己効力感を育てるものである。
- このような「遊び」の持つ諸特徴は、国や社会の問題に対して、自ら考え、自ら判断し、行動していく主権者としての資質・能力を育む主権者教育とも関連性が高い。

「遊び」と 主権者教育 の関係性について

- 「遊び」とは、関わりの中で行われる**主体的**で自由な活動であるとともに、**自発的**な参加意識のもと、異質で多様な**他者と連携・協働**することが活動の面白さをもたらす活動であり、活動を通じて**自己肯定感や自己効力感**を育てるものである。
- このような「遊び」の持つ諸特徴は、国や社会の問題に対して、**自ら考え、自ら判断し、行動していく主権者としての資質・能力**を育む主権者教育とも関連性が高い。

主権者教育で目指す児童・生徒像

全体像	<ul style="list-style-type: none"> 国や地域社会が抱える問題と向き合い、法やきまりをもとに考察し、政治、経済に関する知識を理解し、他者と連携・協働しながら、より良い社会を実現するための方策を主体的に考え、その考えを伝え合う中で相違点を見出し、更なる改善策を追究することができる児童・生徒。 		
校種	小学校	中学校	高等学校
目標	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちの身の周りで起きている地域の課題に興味をもち、実際に当事者へインタビューをしたり、諸資料を集めたりすることを通して問題を自分事化し、より良い地域や社会を実現するための考えを伝え合う中で違う立場や考え方があることに気づき、更なる改善策を検討する子ども。 	<ul style="list-style-type: none"> 身の周りの社会や国家の法やきまりについて事実を基に多面的・多角的に考察し、当事者との対話やインタビュー、アンケート調査など適切な資料を活用しながら政治、経済等に関する知識を習得し、課題の解決に向けて、他者の考えを受けとめ、自らの考えを深めるなどして、よりよい国家・社会のあり方、自分の生き方をじっくり考えて行動しようとする生徒。 	<ul style="list-style-type: none"> 社会で起きている課題に対して法やきまりに関する事実を基に、当事者としての関わりを見出し、実際に当事者や専門家へのインタビューや適切なアンケート調査、諸資料の収集などの探究的学びから、国際的な視野を持ってより良い社会を実現するための具体的方策を議論する。更に、違う立場や考え方があることの理解をよりいっそう深め、自分が社会においてどのような立場から関わるかを想定して改善策を検討できる生徒。
知識・技能	<ul style="list-style-type: none"> 地域や社会の現状や抱える課題に関わる人々の取り組みを理解するとともに、新聞記事や統計などの各種の基礎的資料を通して、情報を適切に調べまとめる技能を身につける。 	<ul style="list-style-type: none"> 社会や国家の抱える諸課題（政治、経済、法など）に関する現状や制度及び概念について理解するとともに、調査や諸資料から情報を効果的に調べまとめる技能を身につける。 	<ul style="list-style-type: none"> 国際社会や国家、地域などの現状や抱える問題に対して明確かつ的の絞られた探究課題を設定したうえでこれまでの社会における取り組みを適切に理解する。併せて適切かつ関連性のある情報を収集し記録するための研究方法を活用する力を身につける。
思考・判断・表現	<ul style="list-style-type: none"> 地域や社会の特色や抱える課題について、多面的・多角的に捉え、その解決に向けて自分たちは何ができるかを選択・判断し、考えたことを説明したり、それらをもとに議論をしたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 社会や国家の抱える諸課題について、多面的・多角的に分析し、公正に判断することができる。 複数の事象の関係を構造的に捉え、わかったことを筋道立てて説明することができる。 諸課題の解決に向けて、他者の考えを受けとめて自分の考えをさらに深めていくことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 国際社会や国家、地域の特色や抱える課題について、関連する概念やモデル、理論について詳細な議論を通じて情報を統合し、有効かつ根拠のある主張をまとめて適切な公的機関等への提案を行う。
主体的に学ぶ態度	<ul style="list-style-type: none"> 地域や社会が抱える課題について、主体的に問題を解決しようとする態度や、より良い社会を考え、学習したことを活かそうとする態度を養う。 	<ul style="list-style-type: none"> 社会や国家の抱える諸課題について、主体的に問題を解決しようとして、よりよい社会の実現を視野に国家・社会の形成に参画しようとして、自分の学びのあり方を問い直す態度を養う。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域や社会が抱える課題について、主体的に問題を解決し、より良い社会の実現のために自らの学びを適切に振り返ったうえで今後の学びのあり方を自ら調整する態度を養う。

主権者教育
で目指す
児童・生徒像

国や地域社会が抱える問題と向き合い、

法やきまりをもとに考察し、

政治、経済に関する知識を理解し、

他者と連携・協働しながら、

より良い社会を実現するための方策
を主体的に考え、

その考えを伝え合う中で相違点を見出し、更なる改善策を追究することができる児童・生徒

小中高の目標

小学校	中学校	高等学校
<p>① 自分たちの身の周りで起きている<u>地域の課題</u>に興味をもち、</p> <p>② 実際に<u>当事者</u>へインタビューをしたり、<u>諸資料</u>を集めたりすることを通して問題を自分事化し、</p> <p>③ より良い地域や社会を実現するための考えを伝え合う中で違う立場や考え方があることに気づき、 更なる改善策を検討する子ども。</p>	<p>① 身の周りの<u>社会や国家</u>の法やきまりについて<u>事実</u>を基に多面的・多角的に考察し、</p> <p>② 当事者との対話やインタビュー、アンケート調査など適切な資料を活用しながら<u>政治、経済</u>等に関する知識を習得し、課題の解決に向けて、<u>他者の考え</u>を受けとめ、<u>自らの考え</u>を深めるなどして、</p> <p>③ よりよい国家・社会のあり方、自分の生き方を じっくり考えて行動しようとする生徒。</p>	<p>① <u>社会</u>で起きている課題に対して<u>法やきまり</u>に関する<u>事実</u>を基に、<u>当事者</u>としての関わりを見出し、</p> <p>② 実際に<u>当事者</u>や<u>専門家</u>へのインタビューや適切なアンケート調査、<u>諸資料</u>の収集などの探究的学びから、<u>国際的な視野</u>を持ってより良い社会を実現するための具体的方策を議論する。更に、<u>違う立場や考え方</u>があることの理解をよりいっそう深め、</p> <p>③ 自分が社会においてどのような立場から関わるかを想定して改善策を検討できる生徒</p>

小中高を一貫する主権者教育の学習プログラム

【主権者教育で目指す児童・生徒像】・国や地域社会が抱える問題と向き合い、法やきまりをもとに考察し、政治、経済に関する知識を理解し、他者と連携・協働しながら、より良い社会を実現するための方策を主体的に考え、その考えを伝え合う中で相違点を見出し、更なる改善策を追究することができる児童・生徒。									
校種	【小学校】	【中学校】	【高等学校】	単元レベルでの活動の手立て					
				小6 「共に生きる社会」	中3 「選挙に行こう！」	高2 「インクルジブ選挙」	中3 「誰もが楽しめるサッカーを考える」	小5 「出生率を計算して少子化を考える」	小3 自己実現活動(体育的活動)「ぼくらのオリンピック」
目標	・自分たちの身の周りで起きている地域の課題に興味をもち、実際に当事者へインタビューをしたり、諸資料を集めたりすることを通して問題を自分事化し、より良い地域や社会を実現するための考えを伝え合う中で違う立場や考え方があがることに気づき、更なる改善策を検討する子ども。	・身の周りの社会や国家の法やきまりについて事実を基に多面的・多角的に考察し、当事者との対話やインタビュー、アンケート調査など適切な資料を活用しながら政治、経済等に関する知識を習得し、課題の解決に向けて、他者の考えを受けとめ、自らの考えを深めるなどして、よりよい国家・社会のあり方、自分の生き方をじっくり考えて行動しようとする生徒。	・社会で起きている課題に対して法やきまりに関する事実を基に、当事者としての関わりを見出し、実際に当事者や専門家へのインタビューや適切なアンケート調査、諸資料の収集などの探究的学びから、国際的な視野を持ってより良い社会を実現するための具体的な方策を議論する。更に、違う立場や考え方があがることへの理解をよりいっそう深め、自分が社会においてどのような立場かに関わるかを想定して改善策を検討できる生徒。	・視覚資料やインタビュー活動を通して視覚障害をもつ人々の生活の工夫や苦勞を理解し、誰もが安心して生活することができる共生社会の実現に向けて自分や社会が取り組まなければならないことについて障害を持つ人々の立場に立って考え、提案することが出来るようになる。	・現代の選挙制度について障害をもつ人々の立場から課題を見だし、公平・公正の視点から考察し、背景となる課題について理解する。 ・多様性を認め合う社会を目指して、どのような課題があるのか見つけ出し、その解決に向けて取り組む人々の姿を学ぶことを通して、解決への糸口を探ったり、新たな課題を見つけたりしながら、よりよい社会の実現にむけて自らの生き方・あり方を問い直す。	・知的、発達の方々の障害をもつをゲストティーチャーとして招き、選挙という主権者としての権利行使の場における困難さを当事者から聞き、それをいかにして解決もしくは緩和できるかを、本人を交えて議論していく。主権者としての意思を示す限られた貴重な機会である選挙における権利行使の意味【(2)イ】を理解した上で、障害の有無に関わらず一人ひとりの人間が尊重される社会の実現【(2)ウ】及び、現代に共に生きる人間として求められる望ましい生き方の考察【(3)】を仲間とともに深めていくこと	・サッカーという遊びを構成するルール(仕組み)を軸に自らがその空間を生み出す主体となって、より面白い遊びを創りだす。 ・起きていた事象を振り返り(感想の共有、意見交換、評価)、次回に向けてアクションを起こす。	・合計特殊出生率を表す数値をもとに、日本の少子化の状況を理解する。 ・少子化のもたらす影響についてこれからの日本の社会にとってどうなることが良いことなのか、自分の視点をもって評価する。	・クラスみんなが参加できるように、ルールや組織を対象とし、オリジナルオリンピック大会を創る。
知識・技能	・地域や社会の現状や抱える課題に関わる人々の取り組みを理解するとともに、新聞記事や統計などの各種の基礎的資料を通して、情報を適切に調べまとめる技能を身につける。	・社会や国家の抱える諸課題(政治、経済、法など)に関する現状や制度及び概念について理解するとともに、調査や諸資料から情報を効果的に調べまとめる技能を身につける。	・国際社会や国家、地域などの現状や抱える問題に対して明確かつ的の絞られた探究課題を設定しうえてこれまでの社会における取り組みを適切に理解する。併せて適切かつ関連性のある情報を収集し記録するための研究方法を活用する力を身につける。	・視覚資料やインタビュー活動等を通して、視覚障害をもつ人々の生活の仕方や工夫、苦勞等について理解することができる。 ・視覚障害について自分ごとで視覚障害について理解を深めることができる。	・障害のある人にとっての選挙での困難さに理解をし、その課題について、異なる立場や対立する問題の権限を捉え、問題点を見いだすことができる。	本時においてはこの観点は評価対象としない。	・サッカーの面白さやルールを理解し、採用しているルールがゲームにどのような意味(効果、課題)を持つのかを見いすことができる。 ・サッカーを面白くするために求められる技能を見いすことができる。	女性一人あたりが生涯に産む子供の人数を表す「合計特殊出生率」は、男性を合わせた2が現状維持の数値であることを説明する。 女性の数と新生児の数を比例させていることを読み取る。	・スポーツの競技会には、組織する人がいることを理解し、競技会運営に参画することができる。
思考・判断・表現	・地域や社会の特色や抱える課題について、多面的・多角的に捉え、その解決に向けて自分たちは何ができるかを選択・判断し、考えたことを説明したり、それらをもとに議論をしたりする。	・社会や国家の抱える諸課題について、多面的・多角的に分析し、公正に判断することができる。 ・複数の事象の関係を構造的に捉え、わかったことを筋道立てて説明することができる。 ・諸課題の解決に向けて、他者の考えを受けとめ自分の考えをさらに深めていくことができる。	・国際社会や国家、地域の特色や抱える課題について、関連する概念やモデル、理論について詳細な議論を通じて情報を統合し、有効かつ根拠のある主張をまとめて適切な公的機関等への提案を行う。	・障害をもつ人々の立場に立って、誰もが安心して生活することができる共生社会が実現するために、何が必要なのかをインタビューや調査活動を通して考え、発表することができる。	・障害のある方が選挙で感じる問題について多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現することができる。	ゲストティーチャーから提案を受けた課題に対して、具体的な制度上の問題点を考察している。チームメンバーと共同して議論を深めるための発言が効果的に出来ている。	・サッカーの面白さやルールについて、多様な価値観、技能差を持つ他者とともに考察し、より多くの人が楽しめる方法を判断し実行していくことができる。	少子化は現状のままでよい、改めてはならないなど、少子化について自分の視点を以て評価する。自分の視点以外の視点の意見を聞き、自分の意見をまとめる。	・オリンピック大会運営に関わって、自らの役割を理解し、よりよく運営ができるよう工夫することができる。
主体的に学ぶ態度	・地域や社会が抱える課題について、主体的に問題を解決しようとする態度や、より良い社会を考え、学習したことを活かそうとする態度を養う。	・社会や国家の抱える諸課題について、主体的に問題を解決しようとして、よりよい社会の実現を視野に国家・社会の形成に参画しようたり、自分の学びのあり方を問い直す態度を養う。	・地域や社会が抱える課題について、主体的に問題を解決し、よりよい社会の実現のために自らの学びを適切に振り返ったうえで今後の学びのあり方を自ら調整する態度を養う。	・新聞記事やニュース映像等から社会が抱える問題について見つけようとしている。 ・視覚障害をもつ人々が社会で活躍する様子や私たちが何をしていくことが誰もが活躍できる社会が実現できるかを考えようとしている。	・現代社会の特色を捉え、障害者との結びつきに対する関心を高め、主体的に追究しようとしている。	議論を通じて、何をすることが出来るかという前提から来たかを認識している。ここで得た気づきを、これからの学びにおいて何が必要となるかの理解へ繋げられている	・サッカーが遊びの一つであるという前提から、遊びを多くの他者と共有して面白い空間を生み出そうとしている。	7年後には選挙権をもつことを自分なりに自覚し、社会の出来事に目を向けようとする。	・オリンピック大会開催に向けて進んで取り組むことができる。

小中高を一貫する主権者教育の学習プログラム

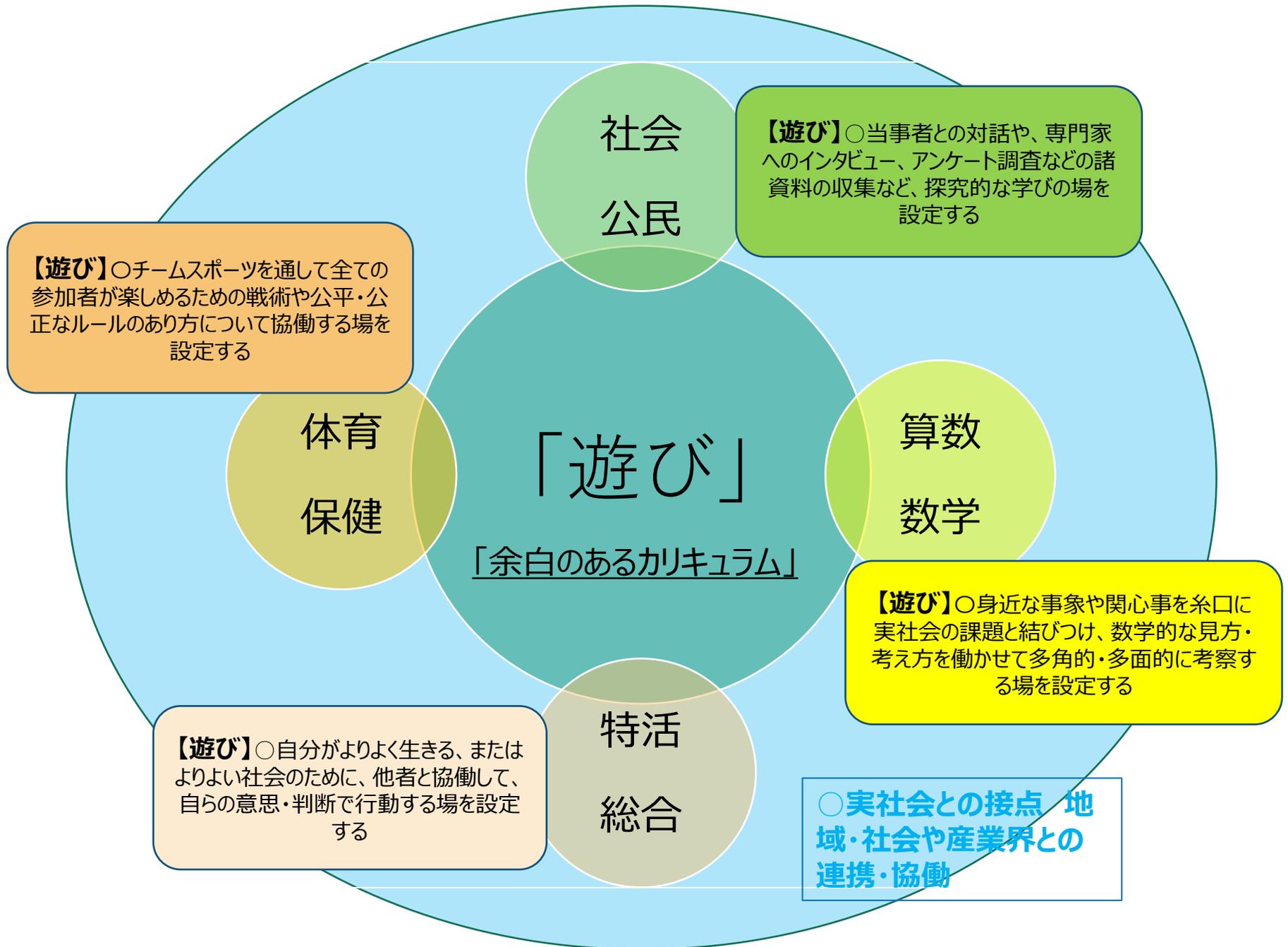
【開発するプログラムの概要】「意思決定」に関わる資質や能力を軸として、社会科を中心に、算数・数学、体育・保健体育の3教科で「知・情・意」を意識した連携を図り、「遊び」を活用しながら「合意形成」をテーマにカリキュラム・マネジメントを通した小中高を一貫する主権者教育の一つの学習プログラムを開発する。

	小学校	中学校	高等学校
各教科	社会科 ◎ 聴覚障害の方との対話 【小6】誰もが安心して暮らせる共生社会の実現に向けて自分や社会が取り組むべき課題を話し合う。	◎ ALS 障害の方との対話 【中3公民】日本の障害者支援のアンケートをふまえ、現在の選挙の課題を直接聞き、公平・公正の視点から話し合いを通して、解決への糸口を探ったり、新たな課題を見つたりしながら、多様性を認め合う社会を目指して自らの生き方・あり方を問い直す。	◎ 知的障害の方との対話 【高2現社】インクルーシブな選挙制度の実現のために主権者として、諸制度を適切に理解するとともに制度の影にある諸課題を浮き彫りにし、解決策を議論する。
	公民科 ○実社会との接点・意思決定 【小6】選挙制度を学習し、仮の選挙公報を作成して模擬投票を行い、各自で投票した理由を考察した。	○実社会との接点・意思決定 【中1地理】人口減少社会となった日本が直面する労働力不足への対策としての移民・外国人労働者の劣悪な労働環境について話し合う。	○実社会との接点・意思決定 【中3公民】国家緊急権の導入の是非をめぐる議論を通して、民主主義のあり方や主権者としての意識を高める。
	【遊び】 ○当事者との対話や、専門家へのインタビュー、アンケート調査などの諸資料の収集など、探究的な学びの場を設定する		
	体育 	○実社会との接点・意思決定・合意形成 【中3体育】サッカーという遊びを構成するルール（仕組み）を軸に、自らがその空間を生み出す主体となって、より面白い遊びをつくりあげるために、自分たちのグループで起きていた事象を振り返り、感想の共有、意見交換、評価をしながら改善に向けてアクションを起こす。	
【遊び】 ○チームスポーツを通して全ての参加者が楽しめるための戦術や公平・公正なルールのあり方について協働する場を設定する			
各教科	算数 ○実社会との接点 【小5】出生率1.3の値が小数値であることから10人を単位に日本の少子化の現状と課題について話し合う。	  	
	【遊び】 ○身近な事象や関心事を糸口に実社会の課題と結びつけ、数学的な見方・考え方を働かせて多角的・多面的に考察する場を設定する		
道徳 特別活動 総合	○意思決定・合意形成・自治活動 【自己実現活動】自らやりたい事柄を紙に書き、互いに呼びかけながら自主的に参加して、互いに協力しながらやりたいことを実現していく活動。 【小3】クラスみんなが参加できるオリンピックを創る	○意思決定・合意形成・自治活動 【生徒会活動】生徒会役員選挙において、投票する権利の保障の観点から「期日前投票制度」の創設に向けて生徒会役員自ら率先して、全校生徒、教職員への提案、規約の改正を行い、期日前投票の制度を作らせた。 【生徒会役員選挙】生徒会選挙の実施要領に基づき、選挙管理委員会の発足、公示、選挙ポスター、立ち会い演説、投票に至る過程を全て公正な手続きに基づいて実施するとともに、文京区選挙管理委員会と協力して実際の選挙で使用される記帳、投票箱を借り受けて生徒会役員選挙を実施した。	○意思決定・合意形成・自治活動 【学校行事の運営】 ・学校行事・修学旅行の立案・計画・運営にいたる過程を生徒の自主的な活動で実施している。
	【遊び】 ○自分がよりよく生きる、またはよりよい社会のために、他者と協働して、自らの意思・判断で行動する場を設定する		

主権者教育で目指す 資質・能力

- 地域・社会の諸課題についての理解
- 調査や諸資料から情報を適切にまとめる力
- 公平・公正に判断する力
- 地域・社会の諸課題の解決に向けて協働して取り組み、合意を形成していく力
- 自己理解・他者理解
- よりよい社会の形成に参画しようとする力

○実社会との接点 地域・社会や産業界との連携・協働



主権者教育
推進会議
最終報告※

「児童生徒が自分の意見を持ちつつ、異なる意見や対立する意見を整理して議論を交わしたり、他者の意見と折り合いを付けたりする中で、納得解を見いだしながら合意形成を図っていく過程が重要」

※「今後の主権者教育の推進に向けて（最終報告）」令和3年3月31日主権者会議推進会議

「遊び」余白の
あるカリキュラム

授業構想の中に児童・生徒が自由闊達に自分自身の疑問や問題意識を表現する場を設けることで、互いに意見を交換し、自身の考えや他者の価値観を受け入れながら思考を深めていくことを重視している。

当事者性
他者理解
公平・公正
実社会との
接点

障がいのある当事者の方から直接にお話をお聞きすることでさらなる問題意識が惹起され、よりよい社会を形成していくための視点や方策をつかむきっかけになる。

障がいのある人にとって選挙は、国民の権利として保障されたものであることはいうまでもないが、そもそも選挙に行くこと自体に障壁があり、権利の行使そのものできない状況にある。障がいのある人々の立場は少数の立場ではあるが、そうした人々の声を反映させていくことは、多様な意見や価値観が存在することを学ぶ機会を提供する



「障がいのある人が直面する投票の壁」
～当事者との対話を通して主権者として公平・公正の視点から考察する授業実践～



「障がいのある人たちの直面する課題に関するアンケート」

結果概要

(2022年10月20日～10月25日オンライン実施)

東京学芸大学附属竹早中学校

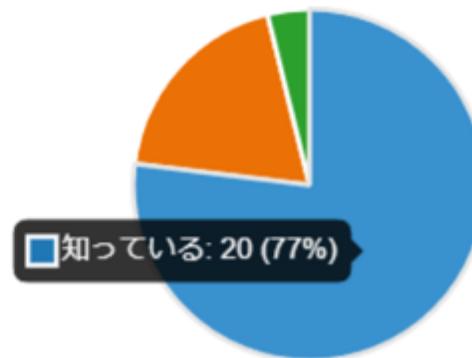
中学3年生 A組 36名

有効回答数 26名

2. あなたは、障がいのある・なしにかかわらず、誰もが社会の一員として暮らすことのできる社会を目指す「共生社会」という考え方を知っていますか。

詳細

● 知っている	20
● 言葉だけは聞いたことがある	5
● 知らない	1



3. 日本は、障がいのある人が不自由なく日常生活を送れるような取り組みが進んでいると思いますか。

詳細

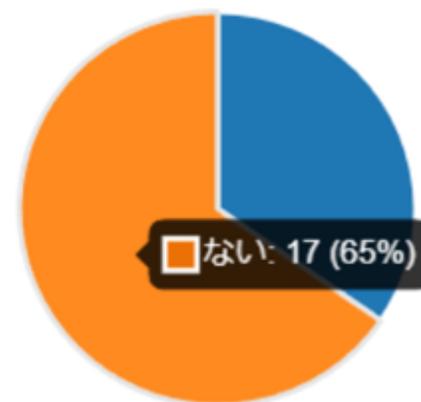
● かなり進んでいると思う	0
● ある程度進んでいると思う	21
● あまり進んでいないと思う	5
● ほとんど進んでいないと思う	0



6. あなたは障がいのある人が困っているときに、手助けをしたことがありますか。

詳細

● ある	9
● ない	17

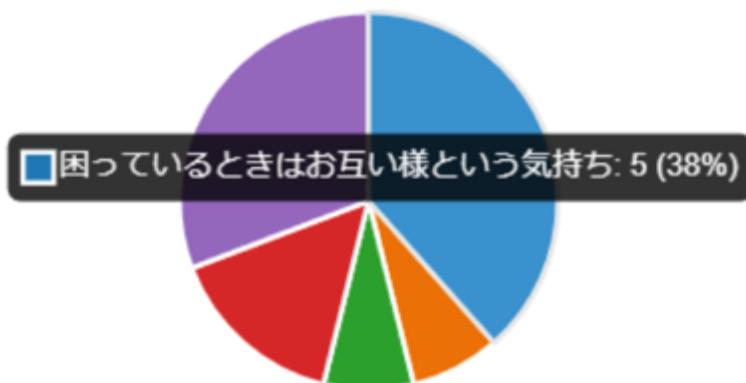


7. 「ある」と答えた方、それはどのような気持ちからでしょうか。（複数回答可）

詳細

[タイトルなし]

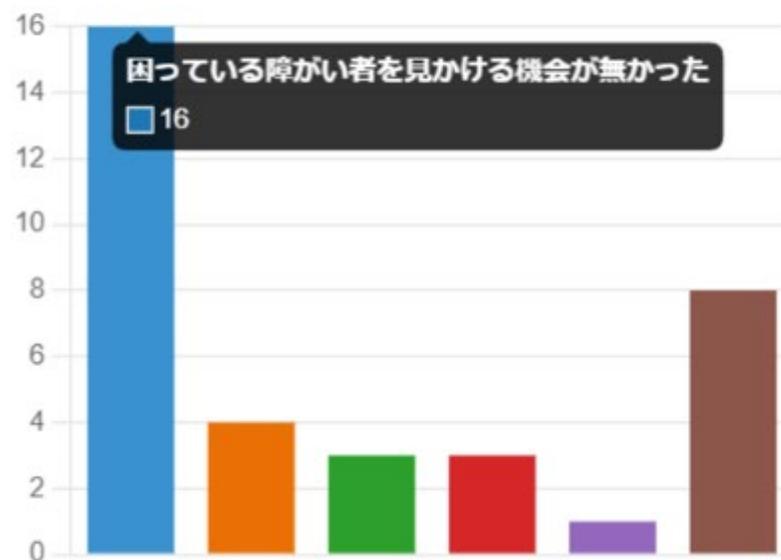
- 困っているときはお互い様という気持ち 5
- 障がいのある人を手助けするのは当... 1
- 障がいのあるひとが身近にいてその... 1
- 将来自分も障がい者になるかもしれ... 2
- その他 4



8. 「ない」と答えた方、なかったのはどうしてでしょうか。（複数回答可）

詳細

- 困っている障がい者を見かける機会... 16
- どのように接して良いかわからなかった 4
- 自分が何をすればよいかわからなかった 3
- お節介になるような気がした 3
- 専門の人に任せるべきだと思った 1
- その他 8



問い：

障害のある人に関する、国や地方公共団体の施策のなかで、あなたがもっと力をいれる必要があると思うものを答えてください。（自由記述）

- 公共交通機関だと思う。今はバスや電車に車椅子の人が乗るためには駅員を呼んで手伝ってもらわないと1人で乗ることが難しい。さらに、人を呼ぶことによって時間もかかるし、ホームなどで待ってる間は危険が高くなるためもっと力を入れた方が良いと思う
- 施策ではないけど、障害差別を無くそうとしているなかでも、未だにそういう意識がある人もいるから、世界中で障がいのある人に対する意識を変える運動をする必要があると思う
- 理解を深める取り組み、というような漠然なものではなく、誰にでもわかりやすく、誰もが知りたいと思えるようなものがあればいい。また、それだけではカバーできない部分がたくさんあるであろうから、やはり政府の援助はなくてはならないと思う。福祉に関する予算をある程度増やし、スロープなどを設置する。また、個人企業などでユニバーサルな取り組みをする場合には幾らかの予算援助などの仕組みを整えていくべきだと思う
- 障害者の視点が想像できない。特に現状で問題ない。
- 医療費の補助。学校での教育。
- 障がいのある人と関わることがあまりないため、実際にどんなことが必要とされているかはよくわからないが、地震や津波、川の氾濫などの大きな災害が起きた時に、障がいのある人は避難が難しい場合があると思う。地震大国の日本だから、避難や避難後の適切な物資の支援など、対策できることはしておいた方が良かった。

【研究主題】

「遊び」を生かして主権者を育てる社会科・公民科を中心とした小中高連携カリキュラムの開発

【開発するプログラムの概要】

「意思決定」に関わる資質や能力を軸として、社会科・公民科を中心に、算数科・数学科、体育科・保健体育科の3教科で「知・情・意」を意識した連携を図り、「遊び」を活用しながら「合意形成」をテーマにカリキュラム・マネジメントを通じた小中高を一貫する主権者教育の一つの学習プログラムを開発する。

実践内容 ※開発するプログラムから一部抜粋

<小学校・6年生> 社会科

【単元名】 国民としての権利（選挙）（(1)ア(7)(1)）

【主な単元の目標】

- 選挙は国民の代表者を選出する大切な仕組みであること、及び、選挙権など政治に参加する権利が国民に保障されていることを理解できるようにする。
- 資料やインタビュー活動を通して視覚障害をもつ人が選挙に行く際の困難さを知り、選挙権が保障されるための課題が何なのか、そのために国や地方公共団体にはどんな対応が求められるのか考え、表現する。
- 自分の周りの人々の置かれている状況に目を向けるために、新聞記事やニュース映像等を活用して社会の出来事を調べ、社会が抱えている課題を見つける。

【学習問題】政治に参加する権利の一つである選挙権が、等しく国民に保障されるために、国や地方公共団体には何が求められるだろう。

【実践例】 ※自己実現活動「より良い社会を目指して」 第4・5/6時

授業の概要

<概要>

- ①ゲストティーチャーの紹介
- ②学習前のアンケート結果や質問項目を振り返り、障害に対するクラスの考えの傾向を捉える。
- ③ゲストティーチャーへ質問をする。
- ④点字器を使って模擬投票をしたり、PCを使いこなして他者とコミュニケーションをとる様子を見る。
- ⑤事前に社会科の授業で学習した国民としての権利である選挙権についてや、ゲストティーチャーへのインタビューを通して、より良い社会を創るために自分や社会ができることについて、「共生社会」という言葉を意識しながら考えをノートに書く。
- ⑥本時の振り返りを行う。



<指導上の工夫>

○地域や社会生活における具体的な課題等を自分との関わりの中で捉えられるようにするための指導上の工夫

- ・ 児童が考える障害者像を捉え直すために、ゲストティーチャーに点字の実演や生活の中で行っている工夫を聞く機会を設けたこと。
- ・ 「自分だったら？」と授業者が児童へ問いかけ続けることで、学習問題を常に意識して考えるようにしたこと。

○小中高を一貫する学習プログラムに資する工夫

- ・ 自分たちが考えた解決策を視覚障害当事者に投げかけ、その反応をもとに再度考えを吟味した。合意形成を複数回行えるようにすることで、合意形成の深化を目指したこと。

○社会科と他教科等との連携

自己実現活動

専門家や関係諸機関等との連携・協働

- ・ 視覚障害当事者
- ・ 文京区選挙管理委員会

効果等

- ◆ ゲストティーチャーとの交流を通して、児童は障害をもつ人々に関心を寄せ、社会インフラなどが自分たち以外の人たちにも使いやすいものになっているかどうか、「共生社会」実現のために自分や社会ができることは何かを考えることができた。
- ◆ 交流後もゲストティーチャーとのやり取りを継続させ、児童の質問や考えに対してアドバイスを受けたことで、児童は考えを見直したり、深めたりすることができた。

時間	主な学習内容	
	社会科	関連付けた他教科等
1/2	<ul style="list-style-type: none"> 日本における選挙制度と模擬投票 	
3	<ul style="list-style-type: none"> 障害をもつ人々が選挙に行く困難さに触れ、選挙の課題がどこにあるのか考える。 	自己実現活動「よりよい社会を目指して」 ・視覚障害者に対する質問をまとめ、インタビュー活動の準備をする。
4-6	<ul style="list-style-type: none"> 視覚障害当事者の話や新聞記事・ニュース等で調べた情報を基に、障害の有無に関係なく選挙権が保障されるために、国や地方公共団体にはどのような働きが期待されるのか、考え、まとめる。 	自己実現活動「よりよい社会を目指して」 ・ゲストティーチャー（視覚障害者）を迎え、インタビュー活動等を行う。 ・自分たちがより良い社会を実現するためにできることを考え、ゲストティーチャーに発表する。 ・ゲストティーチャーからの返信を受けて改めて自分たちや社会ができることを考え、まとめる。

※ 単元名の（ ）内は学習指導要領の内容の該当番号

※ 「自己実現活動」は、教育課程特例校認定によって設置された教科横断的な学びを行う教科である。

【研究主題】

「遊び」を生かして主権者を育てる社会科・公民科を中心とした小中高連携カリキュラムの開発

【開発するプログラムの概要】

「意思決定」に関わる資質や能力を軸として、社会科・公民科を中心に、算数科・数学科、体育科・保健体育科の3教科で「知・情・意」を意識した連携を図り、「遊び」を活用しながら「合意形成」をテーマにカリキュラム・マネジメントを通した小中高を一貫する主権者教育の一つの学習プログラムを開発する。

実践内容 ※開発するプログラムから一部抜粋

<中学校・3年生> 社会科（公民的分野）

【単元名】 私たちの暮らしと政治（C(1)ア(ア)(イ)C(2)ア(ア)(イ)(ウ)イ(ア)）

【主な単元の目標】

- ・我が国の民主政治の仕組みのあらましや政党の役割、議会制民主主義の意義、多数決の原理とその運用の在り方、国民の権利を守り、社会の秩序を維持するための法に基づく公正な裁判の保障について理解する。
- ・障害者の方の話を踏まえ、現在の選挙について公正の視点から考察し、現状と課題について理解する。
- ・課題を解決し、国民が等しく政治に参加できるようにするためには、どのようなことが必要か、考え、表現する。

【学習課題】

主権をもつ国民の意思を政治に反映させ、皆がくらしやすい社会を実現していくために必要なことはなんだろうか。

【実践例】 ※社会科（公民的分野） 「障害のある人からみた選挙の壁」 第5・6/6時

授業の概要

<概要>

- ① ゲストティーチャーより、障害の特性についてお話いただく。
- ② 選挙に行く際に必要な支援について説明いただくとともに、郵便投票の仕組みを勝ち取った経緯や投票に当たった様々なサポート情報を紹介するNHK「みんなの選挙」ページの作成に関わった経験についてお話いただく。
- ③ 選挙の「壁」をつくっているのはだれか。なぜ壁があるのか。車椅子を例に、「個人モデル（障害は車椅子の人にある）」から「社会モデル（障害は車椅子を利用できない環境にある）」へと思考を転換していくことの重要性を理解させる。
- ④ グループ討論
 - 1) あなたが障害者だとしたら、投票に行くかどうか？ その理由も。
 - 2) 障害のある、ないに関わらず、多様な人々の立場から考えるには、何が必要だろうか？
- ⑤ グループ発表と本時の振り返り



<指導上の工夫>

○地域や社会生活における具体的な課題等を自分との関わりの中で捉えられるようにするための指導上の工夫

当事者からお話いただくことで、意思決定場面において、当事者の立場を考えてより具体的なイメージを持って改善策を考えることができるようにした。

○小中高を一貫する学習プログラムに資する工夫

題材選択に選挙の「壁」と、外部人材に「障害者」との直接対話を小中高で共通項にすることで、一貫した学習プログラムとした。

○社会科と他教科等との連携

特別活動（生徒会の組織づくりと生徒会活動の計画や運営）

専門家や関係諸機関等との連携・協働

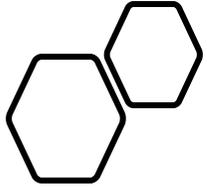
- ・ALS（筋委縮性側索硬化症）患者
- ・文京区選挙管理委員会

効果等

◆主権者として平等に行使しうる権利が妨げられていないか、社会を構成する様々な人の視点から考えることの大切さに気が付くことができた。また、そのような意識をもつことが、多様性を認め合う社会の基礎となっていく、という気付きにもつながった。

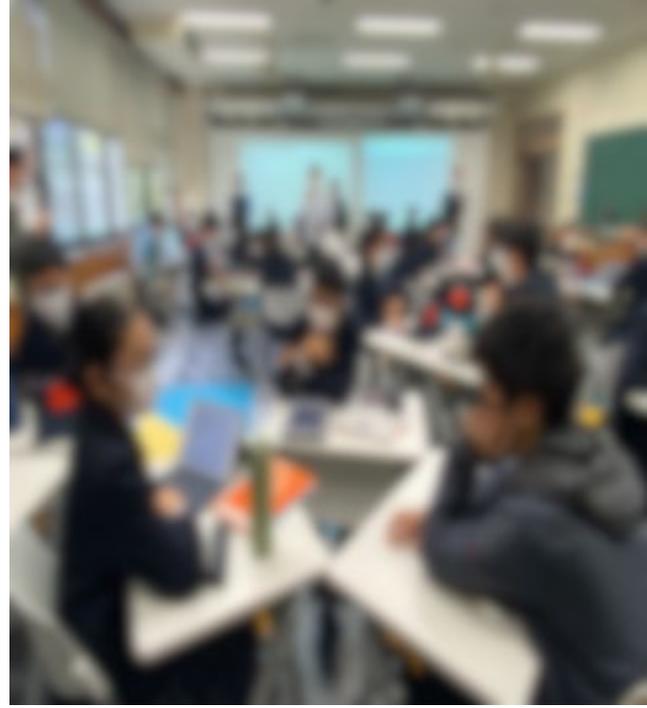
時間	主な学習内容	
	社会科（公民的分野）	関連付けた他教科等
1	民主主義と政治	
2	政治参加と選挙	・特別活動（生徒会活動）「生徒会役員選挙」
3	政党と政治	
4	マスメディアと世論	
5/6	民主政治の推進 「障害のある人からみた選挙の壁」（本時）	

※ 単元名の（ ）内は学習指導要領の内容の該当番号



実践の様子

附属竹早中学校



【研究主題】

「遊び」を生かして主権者を育てる社会科・公民科を中心とした小中高連携カリキュラムの開発

【開発するプログラムの概要】

「意思決定」に関わる資質や能力を軸として、社会科・公民科を中心に、算数科・数学科、体育科・保健体育科の3教科で「知・情・意」を意識した連携を図り、「遊び」を活用しながら「合意形成」をテーマにカリキュラム・マネジメントを通じた小中高を一貫する主権者教育の一つの学習プログラムを開発する。

実践内容 ※開発するプログラムから一部抜粋

<高校・2年生> 公民科（現代社会）

【単元名】政治参加と民主政治の課題
(2(2)イ,3(2)イ(ウ))

【主な単元の目標】

- ・基本的人権の保障、国民主権、平和主義と我が国の安全について理解を深め、日本国憲法に定める政治の在り方について国民生活との関りから認識を深める。
- ・民主政治における個人と国家について考察し、政治参加の重要性と民主社会において自ら生きる倫理について自覚を深める。
- ・障害者とのやりとりを踏まえ、社会の課題を解決するために、社会を構成する個人としてどう生きるべきか、考え、表現する。

【学習課題】

国民の多様な意見が政治に反映されたよりより社会の実現のために、私たちに、社会を構成する一人としてどのような姿勢（態度）が求められるのだろうか。

時間	主な学習内容
1/2	選挙と選挙制度
3	よりよい社会の実現のために 「インクルーシブな選挙制度の実現のために」（本時）

※ 単元名の（ ）内は学習指導要領の内容の該当番号

【実践例】 ※公民科（現代社会）「インクルーシブな選挙制度の実現のために」 第3/3時

授業の概要

＜概要＞ 3校種共同意識調査で見えてきた高校生の持つ意識の課題は「障害＝身体障害」という限定的な理解であった。これを打破し、広く障害者との共生のために改善すべき制度上の課題についての検討を行う。

- ・ゲストティーチャーから障害ゆえに生じる選挙に関する困難（投票前の情報収集や投票所など）についてお話しいただく。
- ・ゲストティーチャーの話をもとに、特に発達障害を抱えた人が選挙に参加できるように改善すべき制度をテーマにワールドカフェでのディスカッションを行う。

ラウンド1「課題の発見、解決策検討」

ラウンド2「解決策の拡張」

ラウンド3「解決策のさらなる深化」

- ・各グループでの議論をまとめ、解決策についてゲストティーチャーへ提案し評価をいただく。

＜指導上の工夫＞

○地域や社会生活における具体的な課題等を自分との関わりの中で捉えられるようにするための指導上の工夫

成年年齢に近づいている高校2年生にとって主体的に取り組みやすい「選挙」をテーマの軸に据えた点。

○小中高を一貫する学習プログラムに資する工夫

小中高の連携による共通項は「合意形成」。高等学校段階では具体的な制度に関して真に求められている改善点を当事者との対話から読み取り、実現可能な制度設計を検討する。

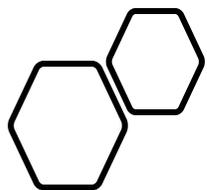


専門家や関係諸機関等との連携・協働

- ・発達障害当事者（当事者としての視点から生徒と対話）
- ・障害者雇用を積極的に推進する企業

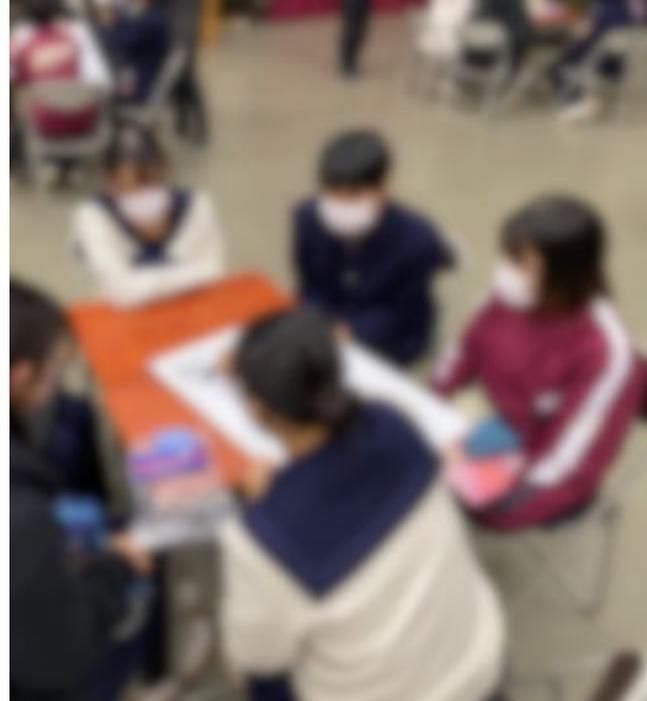
効果等

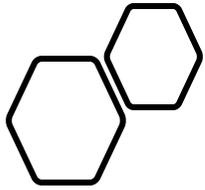
- ◆実際に発達障害の方を交えて議論することで、相手を意識して自分の意見を伝える力及び相手の意見を受け取る力の伸長が図られた。
- ◆ゲストティーチャーから提案内容の評価を受けながら提案内容を精査することで、考察を深めることにつながった。



実践の様子

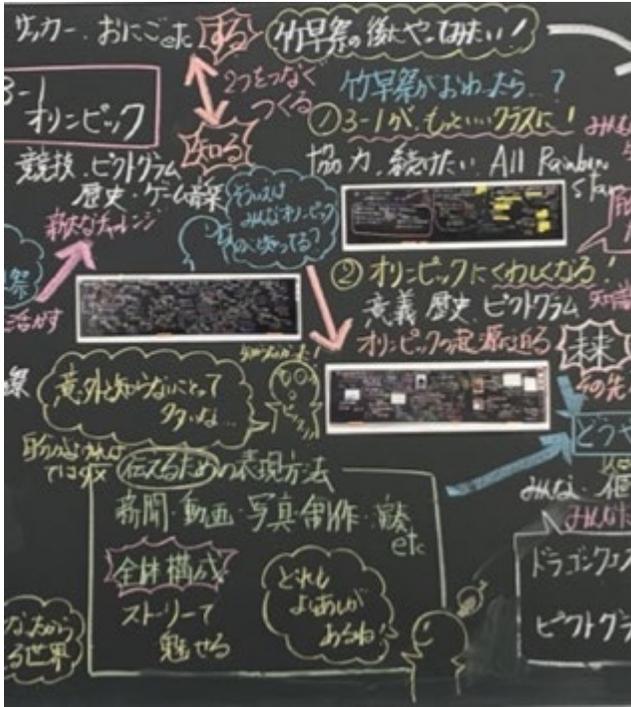
附属高等学校





実践の様子

その他（附属竹早小・中）



実践の効果

【高等学校】

- ◆実際に発達障害の方を交えて議論することで、相手を意識して自分の意見を伝える力及び相手の意見を受け取る力の伸長が図られた。
- ◆ゲストティーチャーから提案内容の評価を受けながら提案内容を精査することで、考察を深めることにつながった。



【中学校】

- ◆主権者として平等に行使しうる権利が妨げられていないか、社会を構成する様々な人の視点から考えることの大切さに気が付くことができた。また、そのような意識をもつことが、多様性を認め合う社会の基礎となっていく、という気付きにもつながった。



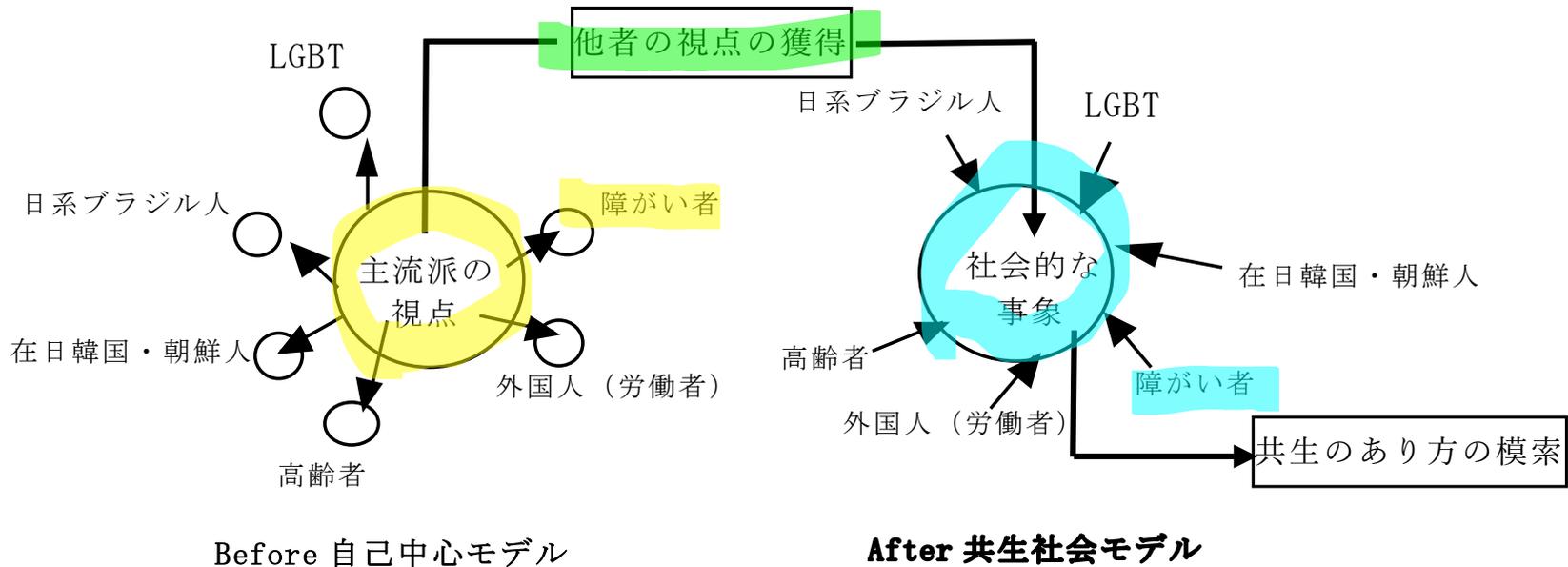
【小学校】

- ◆ゲストティーチャーとの交流を通して、児童は障害のある人々に関心を寄せ、社会インフラなどが自分たち以外の人たちにも使いやすいものになっているかどうか、「共生社会」実現のために自分や社会ができることは何かを考えることができた。
- ◆授業後もゲストティーチャーとのやり取りを継続させ、児童の質問や考えに対してアドバイスを受けたことで、児童は考えを見直したり、深めたりすることができた。



児童・生徒の多様性を捉える姿の変容

多様性を理解するイメージ図



Before ある特定の集団や立場から見た社会の姿であり、これまで獲得してきた自分なりの社会の認識や見方に疑問を持たずにいる生徒



After 社会的な事象を多様な視点から考察することの必要性を認め、自分と異なる他者の存在を価値あるものとして捉え、互いに活かしかう社会を目指そうとする生徒

引用 (共生社会のあり方を考える公民の授業実践) 『「竹早」×「多様性」でえがく未来～多様性を理解する、活かす教育実践』(東洋館出版) より

取組の成果

実践の効果

○小学校

◆ゲストティーチャーとの交流（障害者との直接対話、継続的なやり取り）を通して、「共生社会」実現のために自分や社会ができることは何かを考え、見直し、深めることができた。

○中学校

◆主権者として平等に行使しうる権利について、社会を構成する様々な人の視点から考えることの大切さを学び、そのような意識をもつことが多様性を認め合う社会の基礎となるという気付きにもつながった。

○高等学校

◆発達障害の方を交えて実際に議論し、提案内容の評価や精査を行うことで、相手を意識して自分の意見を伝える力及び相手の意見を受け取る力の伸長が図られるとともに、考察を深めることができた。

○小中高連携の工夫

- ◆題材選択（選挙の「壁」）と外部人材活用（「障害者」との直接対話）を小中高で共通項に。
- ◆「合意形成」を共通項とし、小中高の発達段階に応じた授業を構想。

取組の成果

- ・小中高を一貫した主権者教育で目指す児童・生徒像の整理
- ・社会科を中心に、小中高で一貫性のある学習プログラムを開発するための連携の方策
- ・一貫性や連携において、遊びの持つ「余白」や「余裕」がもたらす接着剤の役割

課題と今後

課題

- 「遊び」（余白・余裕）のもつ教科横断の接着剤としての役割のカリキュラム・マネジメントへの活用
- 「遊び」（余白・余裕）のもつ価値と評価の両立
- 公立校においても実践可能な汎用性の提示

今後

- 「遊び」（余白・余裕）とウェルビーイング（自己肯定、利他性、調和、協調等）の関係性に着目した実践と研究
- 実社会との連携・協働を模索しながら、附属の実践を公立校でも実践しうる形として提示するための発信を行うとともに、共有するための研修の場としての地域の拠点校を目指す